法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

プロレタリヤ文学運動と反戦 : 黒島伝治をめぐって

高崎, 隆治

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
17
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
59
(発行年 / Year)
1967-03-23
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019183

プロレタリヤ文学運動と反戦

——黒島伝治をめぐって——

高崎隆治

プロレタリヤ文学には、意外なほどに反戦作品が少ない。むろん、当時の階級闘争が、反戦・反軍ということをぬきにしてたたかわれたということはありえないし、コミンテルンの二七年テーゼや三二年テーゼにも反戦の必要は明確に示されているが、一般に、プロレタリヤ文学は、工場争議や小作争議を素材として、賃上げ・クビ切り反対・小作料の減免・封建的人間関係の改善等々の、大衆的なたたかいの諸様相や、それらのたたかいに前衛として英雄的・献身的にかかわっていく闘士の革命的行為を、プロレタリアートないしは前衛の観点から描きだすことに主眼がおかれ、当然の結果として、それらの作品が反戦・反軍と直接的に連関することはなかった。

いうまでもなく、帝国主義体制下において、階級闘争と反戦とを切り離して考えることは不可能であり、帝国主義侵略戦争にきびしく対立する反戦運動は、また階級闘争の一形態でもある。たとえば、軍需工場のストライキが反戦をスローガンに掲げ得るように、天皇制ファシズムの支配下にある政治的・社会的現実において、プロレタリアート・農民の一切のたたかいは、広い意味で、必然的に反戦・反軍につながるものであることは否定できない。

けれども、反戦または反軍ということを、直接の主題・素材として扱った、いわゆる反戦・反軍小説は、数多いプロレタリヤ文学作品の中にもそうざらには見受けられない。

このことは、反戦を真向うから取上げることが可能でもあり、また、そうしなければならない立場に立っていたはずのプロレタリヤ文学運動にとって、まさに不可解なことと言うべきではないだろうか。

中日戦争から太平洋戦争敗北に至るまでのあの長い凄惨を極めた冷酷無比な侵略戦争が、自国であると他国であるとを問わず、どれほど無数の人民大衆に無惨な犠牲を強いたことか、思えば天皇制ファシズムの罪状は、工場や農村における資本家・地主の非道なさく取圧迫に勝ること数等である。だとすれば、問題は自ら明瞭であろ

う。プロレタリアートを先頭とする農民・小市民・インテリ等の広範な人民戦線の結集による反戦闘争にこそ、変革への希求に密着するプロレタリヤ文学運動の主目標がおかれなければならなかったのである。

ことわっておくが、こういう問題を提起したからといって、反戦ということを主題としない作品の意義や価値を過少評価するものでは決してない。それはそれでたしかに必要であったし、小林多喜二を持ち出すまでもなく、それらの作品に優れた側面を見出すことはたいして困難ではない。しいたげられている農民にとっては、地主の暴圧をはねかえし、人間的な生活条件を獲得し、飢餓や病苦から逃れるための情況の変革を目指すことがさし迫った課題であったろうし、低賃金や苛酷な労働条件によってしめあげられ、常に首切りの座に据えられている労働者には、カク首反対や賃上げをたたかいとることが急務であったにちがいない。そして、彼等のそういった願望を組織し、革命に立上る意欲と勇気を奮いたたせることが、プロレタリヤ文学の最も重要な課題の一つであったことも事実である。たしかに現実は、そういった暗黒と不安と恐怖に満ちていたのであるから——

けれども、もしも、プロレタリヤ文学の旗手たちが、より広い国内外の政治的経済的客観情勢の正確な分析と展望の上に立ち、文学者の眼をもって日本的現実を鋭く洞察し、前衛作家としての任務について、何がより第一義であるかを熟考したなら、自らの文学運動を、反戦ぬきの単なるストライキ小説やオルグ小説の域にとどめることは許されなかったはずである。

もちろん、「種まく人」以来、「文芸戦線」を経て「戦旗」、そして転向現象の起るまでのプロレタリヤ文学十余年の歴史の上で、たとえばプロレタリヤ文学陣営内の諸派の連合体である左翼文芸家総連合が、事実上唯一の仕事として行なった「戦争に対する戦争」と題する反戦創作集刊行（一九二八）の意義や、その他、ナップ結成前に、主として「文芸戦線」に掲載されたいくつかの反戦作品の存在を無視することはできない。が、プロレタリヤ文学陣営相互の反目、離反、攻撃等の一種の主導権争いの一応の落着の結果、真先きに取上げられた前記「戦争に対する戦争」刊行の線を、なぜ、その後もおし進め、つき進めていかなかったのか。

一体これはどういうことなのか。彼等は、たとえば二七年テーゼを、文学者として主体的にどのように受けとめていたのだろうか。「戦争に対する戦争」は、二七年テーゼの所産であることはたしかなのだが——

シベリヤ出兵・山東出兵、そして次に来るものが大陸への全面侵攻であるという予想が立てられないほど彼等は未熟ではなかったはずだし、事態も又それほどに平穏ではなかった。さらに、三・一五、四・一六という弾圧の狂暴化を、侵略戦への準備段階と考えないような無力なコミニズムではなかったはずなのだ。二七年テーゼはなによりもそのことを明瞭に示している。にもかかわらず、反戦文学への要請が組織的・精力的に作家の主体的希求として燃え出なかったことは、一体どうしたことであろう。

「種まく人」がクラルテ運動の日本における実践的適用として、もっぱら反戦主義を最大の主眼に置いて創刊されたことは周知である。そして、プロレタリヤ文芸連盟が、一応それを受けついだという形で結成された時、「反戦と平和」も同時に機関誌「文芸戦線」

に継承されたとみることができよう。反戦作家黒島伝治のいわゆるシベリヤ物の主要な部分はこの時期、つまり一九二六・七年から、彼がナップに参加する以前に書かれている。だが、一口に反戦小説といっても、誤解をおそれずに言えば、それを創造する作家主体に軍隊経験がなければ、その作品化は不可能に近い。（戦後の戦争文学が、たとえば野間・梅崎といった軍隊経験者によって書かれている事実はこのことを裏書きする。）そして、その軍隊は誰れにでも門を開いているわけではない。（壺井繁治は危険思想の持主ということで、たちまちに追い出された。蔵原惟人は在営中にマルクス主義の勉強をしたということだが、蔵原は他の人々、つまり黒島・立野・壺井等とちがって、おそらくプロレタリヤ文学陣営内にはほとんど例をみないと思われる一年志願兵――したがって彼は軍曹か少尉のはずだ――という特権者であって、この場合らち外だろう）人々の一般的な日常生活とは完全にしゃ断されたところで展開される特殊な集団の特異な生活、それが軍隊である。その特殊な特異な体験を経てこそ、軍隊内部の矛盾も常識を越えた論理も、さらには陰惨な日常や残酷も生々と描き出すことが可能となる。黒島をはじめ、越中谷・立野・壺井等、ごく少数の作家だけが如上の体験者であったことと、反戦作品の量的な少なさとは決して無関係ではない。特に、それらの人々の中で、反戦作家の第一人者とみられる黒島が、最も長い軍隊経験をもち、さらにはシベリヤ出兵に際して外地に送られた唯一の人であったことも注目すべきことがらである。だが、果して問題はそれだけで片付くだろうか。

黒島伝治は一九二六年に早くも「リャーリャとマルーシャ」というシベリヤ物を書き、翌年には「橇」「渦巻ける烏の群」を発表した。続いて「雪のシベリヤ」「氷河」「パルチザン・ウオルコフ」等を書いて、反戦作家としての特異な存在となった。更に、一九二九年にはプロレタリヤ芸術教程（1）に「反戦文学論」を執筆したが、これはプロレタリヤ文学における最初のまとまった反戦理論であり、迫りつつある帝国主義侵略戦争に対する熱っぽい警告と主張に満ちた著述で、彼の反戦・反軍が、いかに彼にとって主体的な真実に深く根ざしたものであるかを知ることができる。

ところで、「反戦文学論」のあとがきの執筆者自伝の中で、黒島は「ここ数年間は主として戦争反対の思想・文学の宣伝につとめたい」という抱負を語っているが、われわれは彼のこの時のこの言葉に注目する必要があるのではないだろうか。

前述の如く、二六年からこの年、つまり二九年まで、もっぱら反戦作品を書き続けてきた彼は、翌三十年に、その抱負にたがわず、彼にとって唯一の長篇である「武装せる市街」を発表した。おびただしい伏字にもかかわらず、それはただちに発禁となった。従来、自分が体験したことでなければ書かなかった黒島が、シベリヤ物とちがう未経験の場所と事件にまでつき進んだことに、彼のなみなみならぬ決意と意欲のほどがうかがわれるが、この作の出来ばえはともかく、黒島にとってこの発禁問題は一つの重大な曲り角を意味していた。

思えば、一九一九年の入隊から、ひそかに書き続けられた「軍隊日記」以来、彼にとって最も憎悪すべき敵は、階級敵としての資本家ではなく、ほかならぬ、天皇制国家権力の集中的表現としての軍隊そのものであった。このことは、彼が工場労働者出身ではなく、貧農出身の兵士であったことと関係する。将校でも下士官でもなか

った彼は、日本軍隊においては当然のことながら牛馬以下の存在として人間的な権利・思考の一切をはく奪され、指折り数えた除隊を前に、雪のシベリヤへ追いやられ、あげくのはてに、後年、彼の生命を断つにいたった、当時においては不治とされた結核病者となって、つまり、使用に耐えぬ兵としてようやく放免されるような酷使に終始したのであった。彼の反戦・反軍はここにこそ必然的な出発の基盤があった。プロ芸分裂の際、より階級的な立場に立っていたはずの前衛芸術家同盟に参加せず、文戦に踏み止まったのも、「かれの政治的信念よりも芸術的信念によるもの」（山田清三郎＝プロレタリヤ文学史）というよりは、実は、インテリでも工場労働者でもない貧農兵士（というより廃兵だろう）黒島の階級敵のイメージが、ラジカルな小市民インテリ出身の文学者たちのそれと、大きなずれがあったというべきではないだろうか。

ともあれ、「武装せる市街」の発禁は、そういう黒島に大きな衝撃を与えずにはおかなかった。文戦脱退、文戦打倒同盟の結成、そしてナップへの参加という黒島の発展的コースの過程は、単純に、階級闘争の激発による彼の現実認識の深まりだけではない。一作ごとに前衛的反戦作家への道を探りつつ前進してきた彼が、発禁を契機として、敵の攻撃力のなみなみならぬ狂暴化に意識的に立ち向おうとした決意の表明であり対決の姿勢であった。

だが、同時に彼は、この弾圧によって反戦文学発表の限界をも、いやおうなくおしつけられたことを知った。

くりかえすが、それはナップ結成の翌々年、一九三〇年である。「戦争に対する戦争」から僅か二年の月日である。

かくして、「ここ数年間は」積極的にとり組むはずであった黒島の反戦は、そこから突破口を見出し得ないまま、後退し、やがて、閉塞の憂目をみるわけである。

発禁の翌年、作家同盟の中に農民文学研究会を組織し、「農民文学の発展」を書いたのはその証左でもある。さらに言えば、一九三二年には反戦の素材を過去に求め、「明治の戦争文学」について論じたのも、前年の九月に起った全面戦争の前ぶれである満州事変を、重大な危機と感じながらも、直接に大陸侵略を扱うことを彼にあえて避けさせた結果であると言ってさしつかえないだろう。満州事変以後に書かれた黒島の反戦小説は「前哨」（プロレタリヤ文学＝昭七・二月号）一篇のみで、これもたちまち発禁になったことを思えば、状況は反戦文学の存在をみじんも許容せぬ急傾斜をもって進行し悪化したことが知れる。だからこそ「平時における反戦の必要」（反戦文学論）を黒島は力説強調したのであったが――

反戦文学は「平時」？にこそ書かれなければならなかったのだ。目前であるという意味においても、突入してからでは遅いという意味においてでも。少なくともナップ結成前後から二・三年の間、プロレタリヤ文学運動の高揚期において結実しなければならなかったのである。このことは断じて人民戦線運動の時点でのみ論議されるべきではない。相次ぐ弾圧の強化の中で、優れた書き手を次々に奪われたこの時期に、結果論的な注文をつけるのは酷かもしれぬ。けれども、この時期は、プロレタリヤ文学史上まさしく運動の頂点にあたっており、反戦文学も又この機を逸しては後に書き得なかった事実に照らして、やはり、ねばならなかったという反省が生まれるのはやむを得ないであろう。

では、なぜあれほどの運動高揚期に反戦文学が組織的に書かれな

かったのか。

それは、共産主義芸術の確立を目指す戦旗派が、社会体制の変革こそが急務でプロレタリアートの階級的勝利は、ファッシズムをも含めて一切の人間悪・社会悪の根源を断絶できると考えていたからにちがいない。たしかに革命の成功は十分にそれを約束する、いや間違いなく約束したであろう。そしてその変革は幾多の困難を伴ないながらも、主観的にはやがて達成されるはずであったのだ。ナップが、反戦をストライキや小作争議に優先すると考えなかったことは、彼等がそういう見通しをもっていたからにほかならない。なるほど、当時の社会情勢の一面には、そのような幻想が浮かぶほどの緊張した場面も部分的には展開したにちがいないが、運動が一部前衛だけの独走に終ったことを思えば、運動の未熟さとともに、階級敵の実体、及び現実の社会的力関係の誤認をも認めなければならないだろう。したがってプロレタリヤ作家が、明日に迫る（と思われる）革命のために、より高い階級的観点を獲得しようとあせればあせるほど、「反戦」は当面の目標・急務からはずれていったということが推測できる。

では、ナップ指導者たちのそういう誤った情況判断と方針は一体どこからきたのだろう。ひとたびは二七年テーゼの線に沿って左翼文学の連合を提唱し結成したナップの理論的指導者蔵原惟人（当時ナップはまだ結成されてなかったが）を代表とする革命的作家たちは、なぜにその左翼文芸家総連合を自然消滅に導いたのだろうか。

二七年テーゼはその冒頭で「日本帝国主義と戦争」をとりあげ、「日本帝国主義とアメリカ及びイギリスのそれが、太平洋の帝国主義的分割のための血戦の準備をしている」と告げている。そしてその前段階は「支那に対する日本の干渉」であると規定する。これはまさしく誤りのない結果をやがてもたらした。が、コミンテルンは続けて次のような要請を掲げた。

――日本共産党は次のごとき行動綱領を提出し、次のごときスローガンを発しなければならぬ――一、帝国主義戦争の危機に対する闘争　二、支那革命から手をひけ！　三、ソビエート連邦の擁護　四、植民地の完全な独立（以下十三項まで略、二七テーゼ）

そして、「戦争に対する戦争」の記念碑的な反戦への結集がなされた。ここまでは正しかった。いや、もう一歩進めて、三・一五の直後に結成された「ナップ」も、当時の情況からは必然でもあった。然し、問題はここから先である。なぜなら、ナップが総連合の代役となり得ない以上、つまり、二者は性格のちがう二つの団体であり、それはそれぞれに存立させねばならない運動体であるからには、総連合の消滅は明らかにまちがいであった。だが、問題を反戦に限って考えれば、つぶされた総連合に代って、ナップがそのことを主張することは可能であった。否、むしろ、総連合解散の時点においては、ナップこそがそれを行なわねばらぬ唯一の文学運動体であったのだ。

ナップは成立の翌年、組織のくみかえを行なった際、はたしてそのことに気づいたのであったかどうか、「戦争反対に関する件」を江口渙の報告にもとずいて可決している。

（一）戦争反対のための各種のリーフレット・パンフレット・創作集の刊行　（二）戦争反対のための我々のあらゆる技術提供。

これは当然すぎるほど当然な決定である。しかし、決議は遂に実践に移されることなしに終った。たしかに、ナップは反戦の必要を

「戦争に対する戦争」以後にも感じていたのだ。が、それが文学的営為として結晶しないからには、やはり反戦が観念的・一般的にしか理解把握されていなかったというそしりを免れることはできないだろう。

かくしてナップは、総連合解散という誤謬に続いて、反戦の有効な最後の機会をも、ここで無為に失なってしまったのである。なぜか？

コミンテルンの一支部であった日本共産党が、テーゼに忠実であろうと努力したことはたしかだし、作家同盟も又、その共産党との密着に努めたことも事実である。しかしながら、いや、それだからこそ、「勤労大衆の主要敵たる天皇制に反対して力を集中するということが不充分であった」（三二テーゼ）当時の共産党の欠陥は、同時に作家同盟の弱点・誤謬となったにちがいない。つまり、「軍部すなわち天皇制官僚中の最も反動的な最も攻撃的な部分に対しても、ただ典型的なブルジョア国家にある軍部という一般的規定の範囲を出なかった」（三二テーゼ、傍点引用者）共産党及びコミンテルンの誤った分析による現実認識の過誤は、そのまま作家同盟の観点となり、反戦・反軍は単なる決議の域にとどまったに反し、労働争議・小作争議に比重が一方的にかかって主客のバランスが失なわれたといえよう。そして、三二年テーゼが「労働者農民および都市貧民の最も広汎な大衆の不満と抗議と闘争の一切の現われを巧みに戦争と軍事的警察的天皇制に対する政治闘争の軌道に向けること」を要請した時には、文学運動にとって、もはやそれは遅きに過ぎていたのである。

天皇制に対する過少評価は、侵略戦争に対する積極的にして一義的な取組みの必要を、安易な観念的な対処に変ぜしめた。それは一つには、第一次世界大戦を、労働者農民の勝利に終る内戦へ積極的に転化させ得たソビエト革命の成功が、日本帝国主義侵略戦争の危機を、党及び作家同盟に軽視させる大きなモメントとして働いたにちがいない。しかしながら、たとえ戦争が起っても内乱へ導き得るという彼等の安直な確信は、コミンテルンへの盲従に終始した主体性の欠落として、文学者の場合特に銘記し批判しなければならないであろう。文学と政治という古くて新しい命題の解答がここに見事に現われていると考えるのは、はたして早計でありひが目であろうか。が、とにかく、文学を政治のプログラムに無条件的に従属させた一つの結果がここに象徴的に現出していることだけはたしかである。

まもなく、運動が崩壊のきざしをみせはじめ、転向現象があらわれてきた段階に至って、プロレタリヤ文学陣営内からも転向作家の間からも、反ファシズムの必要が叫ばれるにいたったことは、如上の文学と政治との関係と決して無縁ではなく、革命の幻影が消え、社会変革の不可能を知った人々が、侵略戦争を直接の脅威として主体的に感知したからにほかならない。むろんそのことはヨーロッパにおける人民戦線運動の提唱に呼応するという一面をも有してはいたが、一方この国の中国に対する全面侵略が、僅か二年の差ではあるが欧州における第二次大戦開始に先立っていたことを思い合わせれば、時は既に遅すぎたと言えるし、又、もはや文学運動を解体してしまった人々のそれが、何ほどの力をもち得ないものであることは自明であろう。むろん、人民戦線的な反戦運動を不要というのではないが。

反戦文学が、ナップ結成以前により多く書かれているとは前に述べた。生まれるには生まれるべき理由・条件が存在していた。それはコミニズムがまだ明確な思想としてプロレタリヤ文学者たちに捉えられていなかったからである。ちょうどそれは、ナップが反戦を目標に掲げなかったことと表裏の関係であり、それ故にこそ反戦は社会民主主義者やアナーキストや小市民作家を含めた雑多な文学者たちの目的意識として、彼等の文学の主要な主題・素材となることが可能であったのである。「戦争に対する戦争」の執筆参加者が、各派混合の多彩な顔ぶれをみせていることはこの事情を物語るに十分だし、また、それだからこそ、反戦という目標はこの時点において全体的な共通の、流派を越えた旗印になり得たのでもあるが、一面においてはたしかに皮肉な現象でもあったと言えよう。むろん、黒島伝治とてそれは決して例外ではない。彼の代表作「渦巻ける烏の群」における厭戦的な不明確な思想傾向を例にとっても、容易にこのことは理解できる。つまり、黒島を含めて、反戦作家のすべてが、未だ党的視点からの文学創造を営むまでには至らず、後に、ナップ結成によってプロレタリヤ文学が急速に革命コースを疾走し始めるや、反戦はかえって後退し、二七年テーゼの域を出ることのないプロレタリヤ文学運動の中で、それは傍流的な存在となり、少数の反戦作家が自らの手で反戦文学の方法を探り出すという困難に立ち向かわねばならなかったのである。「武装せる市街」は、ナップに所属はしていたが、そういう黒島の孤立的な営為の中から生まれた作品であり、蔵原の理論を手本とした小林多喜二とは比較にならぬ別の意味での文学的痛苦がそこには存在していた。「武装せる市街」の欠陥も、その一端はこの辺に起因するものと考えられるが、ともあれ反戦文学は、プロレタリヤ文学の中心としての開花をみずに終末を迎えねばならなかった。

反戦文学は黒島の言う如く、戦争開始以前において必要であった。十五年戦争に突入した後においてでは、日本的情況下でそれらは発表の限りではなかったのだ。プロレタリヤ文学運動は黒島を育てず、立野信之・越中谷利一その他の反戦作家をも育成することなく跛行的に発展し、その故にこそ、又自らの生命の閉塞をも早める結果をもたらしたというべきであろう。（一九六六・一二・二〇）